

昭和61年11月4日～11月29日  
大学図書館2階展示ホール

## 下田歌子関係書簡

書簡は、通信手段としてだけでなく、その個人を研究する上で重要な資料となる。下田歌子は、数多くの書簡及び来信を残しており、その交遊の広さは、行政・教育・文化関係者の多岐にわたっている。今回は、そのいくつかを選び、紹介する。

- 1 下田歌子書簡 (下田歌子関係資料 297)  
父(平尾鏗藏)宛 一通 明治二十一年六月二十日  
関西旅行の途次、岩村滞在の為、帰京をのぼす。  
父(平尾鏗藏)は、幕末に際して岩村藩の朝廷帰順周旋のため奔走したが、慶応四年(1868)理由不明のまま「隠居謹慎」を命ぜられた。明治三年神祇官宣教掛を仰付られ、東京に出るが、明治四年三月神祇官が廃止されると、八月宣教掛の任を解かれる。全体に不遇の生涯を送った。
- 2 下田歌子書簡 (下田歌子関係資料 27)  
徳富猪一郎宛 一卷 [明治二十二年]三月十一日  
「国民之友」よりの読書歴の問合せに答える。  
徳富猪一郎(文久三年～昭和三十二年(1863～1957)) ジャーナリスト。筆名 徳富蘇峰。徳富蘆花の兄。明治十九年 民友社創立。「国民之友」「国民新聞」等を創刊。
- 3 下田歌子書簡 (下田歌子関係資料 1721)  
尾崎行雄(東京市長)宛 一通 [明治三十七年]二月十九日  
日露戦争銃後の将兵遺家族の困窮を婦人団体として援助いたしたく御尽力を乞う。  
尾崎行雄(安政六年～昭和二十九年(1859～1954)) 政治家。号は罌堂。明治十五年立憲改進黨の創設に参加、大同団結運動で活躍する。明治三十三年立憲政友会創設に参加。明治三十六年～大正元年 東京市長を務める。
- 4 下田歌子書簡 (下田歌子関係資料 883)  
坂寄みつ子宛 一通 明治三十七年一月十五日  
上京勉学の事、家族の賛同を得た上は一層責任を尽くされるよう。  
坂寄美都子(明治十六年～昭和五十年(1883～1975)) 下田先生の薫陶を受け、実践女学校教諭。清国留学生部舎監を務めた。秋瑾及び清国留学生・下田先生の逝去の前後などについて語った「坂寄美都子談話筆記」(下田歌子関係資料 3001)は、貴重な資料である。

- 5 下田歌子書簡 (下田歌子関係資料 1882)  
成田芳子宛 絵葉書一枚 [明治四十二年]十一月二十九日  
(北京肅親王府における芳子に宛てて)蒙古学生その後如何。将来は手を借りずして、女子教育開発を期待す。御子息様、御成人云々。  
明治三十八年、北京の肅親王からの依頼により、後宮の夫人、王女たちの教師として、実践女学校清国留学生部教師木村芳子を単身赴任させた。木村芳子は、和育女学堂と名づけられた学校で日本語をはじめ算数・図画・習字などを教えた。彼の地で成田安輝と結婚し、一児をもうけたが、明治四十三年急逝した。
- 6 下田歌子書簡 (下田歌子関係資料 892)  
蜂須賀笛子宛 料紙紫苑襲 一通 [大正七年春]  
祖父茂韶の喪に花を贈り、隔りて逢わぬ覚束なさを寄す。  
蜂須賀茂韶は、徳島藩主。幕末は公武合体派に属した。新政府樹立に尽力し、侯爵となる。笛子は、下田先生の薫陶を受け、和歌の添削及び和歌を贈った書簡が多い。
- 7 下田歌子書簡 (下田歌子関係資料 3616)  
金子辰子宛 一卷(二通・詠草添削一通) 明治三十四年  
①帝国婦人協会への会費払込みの御礼。付「帝国婦人協会会費領収書」(金五十円) ②稲垣が北海道で大変お世話になった御礼。辰子の病気の心配。 ③詠草添削一通 朱筆 下田歌子
- 8 嘉納治五郎書簡 (下田歌子関係資料 2047)  
下田歌子宛 一通 明治二十四年七月八日  
明九日結納と決定、結婚式の節は御出席乞う。  
嘉納治五郎(万延元年～昭和十三年(1860～1938)) 教育者・柔道家。明治十五年講道館を設立し、講道館柔道を創始。夫人は下田先生の教え子。
- 9 井上馨書簡 (下田歌子関係資料 2056)  
下田歌子宛 一通 [明治二十年代]三月十二日  
野村久子と萬里小路氏との縁組について。  
井上馨(天保六年～大正四年(1835～1915)) 政治家。幕末の討幕運動に参加。第一次伊藤内閣では外相。極端な欧化主義政策をとり、条約改正に努力したが、明治二十年外国人裁判官の採用などを強く批判されて辞職。その後、内相・蔵相等を歴任。
- 10 伊藤博文書簡 (下田歌子関係資料 2071)  
下田歌子宛 一通 明治二十八年八月二十六日  
帰朝を祝し、今夜来臨、高話拝聴いたしたし。  
伊藤博文(天保十二年～明治四十二年(1841～1909)) 政治家。明治十八年内閣制度の創設にともない。初代総理大臣・枢密院議長。第一次伊藤内閣では、井上馨外相を中心として欧化主義政策をとり、条約改正をはかる。明治四十二年ハルビン駅頭で暗殺。

未だしミ<sup>レ</sup> 拜願を得ず候へ共いづも御健勝邦家の為御精勤の段深く御喜び申上候さては先年末一度は御邪魔申上女子将来の教育等二就きても御高教仰ぎ度と存居ながら近來ハ殊の外御多忙のよしゆゑさし迫りたる義にも無之とぞんじさしひかへ居候次第に御座候然る所目下の形勢実二空前の大事起り候てわが同胞の酷寒の地に死生を争い候事二立ちむかう段女子の身としてハ殊更に耐へ難き義には候へ共国家の辱は屈すべきにあらず全国民が血を以て是非とも大勝を得ざるべからざる次第と被存候就きてはかゝる大節二のぞミ候ふ国民の残務ハ極めて多方面なるべくと存候へ共女子の範用ニ於いて殊ニ尽力すべきハ出征兵士をして毫も内顧の慮へあらしめざる一事

なるべくと愚考仕り候ふ二つきまづ同感の婦人と会合して其家族の慰問と救助との方法考六九中二御座候而して大躰ニ於けるは区分けを察してもよりの人々より助力保護するやうの事二仕り度と存じ居候能ふべき丈迅速にとハ存居候へ共何分敷日間二実地救助等二着手することはちとむつかしけるべく早くも来月初旬よりと被存居候然る二日々の新聞紙上二散見する所二よれば随分出兵家族の貧困且夕二迫り居るかのものも有之や二御座候依りて甚だ御多忙中乍恐縮自然各區長がたと御面談の御序も有之候ハ、近々女子の団躰ニ於いて出兵家族救助の可有や二傳聞被遊候故暫くの所御保護なし置かれ候様御心ぞへ遊ハし置被下候様伏て祈り入候過日来より拜趨にて此事申上度と存候へ共極めて

御事多二在しますべくと被存候候懇と一書を念じ置候猶此件二就き御心添へ可被下義もあらせられ候ハ、何卒電話にて一寸御申聞ケ被下度候何も<sup>レ</sup>右のミ<sup>レ</sup> 勿々かしこ

二月十九日

尾崎市長様御前二

下田歌子

電話 新 三三四四

11 高崎正風書簡 (下田歌子関係資料 2058)

下田歌子宛 一通 [明治二十四年]十月九日 夕食に招待。高崎正風(天保七年~大正元年(1836~1912)) 桂园派歌人。明治維新後、宮内省出仕。明治二十一年御歌所設置により、所長となる。下田歌子の和歌の師。下田歌子は高崎正風らの推挙により、明治五年宮中に出仕した。

12 佐佐木高行書簡 (下田歌子関係資料 2080)

下田歌子宛 一通 [明治四十一年]十二月二十三日 明酉年、新聞の初刷りに依頼されしもの、添削乞う。佐佐木高行(天保元年~明治四十三年(1830~1910)) 政治家。土佐藩士。大政奉還運動推進に努力した。維新後、刑部大輔、参議、司法大輔。岩倉遣外使節隨行後は、左院副議長、枢密顧問官等を歴任。下田歌子の良き理解者であった。

13 物集高見書簡 (下田歌子関係資料 334)

下田歌子宛 一通(印刷物同封) 大正四年三月二十九日 広文庫刊行について。物集高見(弘化四年~昭和三年(1847~1928)) 国学者。国学を玉松操・東条琴台(下田歌子の祖父)・平田鉄胤に学ぶ。東京大学で国文学を講じ、明治十九年教授。「初学日本文典」「日本大辞林」「広文庫」等を編纂。「広文庫」は、和漢書・仏書中から五万余項目を抽出し、五十音順に排列し、その出典を挙げている。大正五年刊行。

14 清浦奎吾書簡 (下田歌子関係資料 2171)

下田歌子宛 一通 大正九年十二月十一日 愛国婦人会の事業改革について助言。清浦奎吾(嘉永三年~昭和十七年(1850~1942)) 政治家。号は奎堂。山県有用の信任を受け、内務省警保局長、司法次官、第二次山県内閣では司法大臣を務め、その後、大正十三年一月七日西園寺公望の推薦により、清浦内閣を成立させたが、五月十日の総選挙の結果、六月七日総辞職し、政治の第一線から退いた。下田先生との親交は篤く。岐阜県岩村町の下田歌子顕彰碑の碑面表に清浦奎吾筆の家額、裏面には清浦奎吾の撰文と寿詞が彫られている。

\* 下田歌子関係資料の次に付した番号は、請求番号である。

釈文

下田歌子書簡 坂寄みつ子宛

御文のやう何も承り候其後御帰国後御上京御勉学の義も皆様の御気「一分」御宜しく在しませ候由深く満足致候猶此上は一層御責任を尽され候ハん事をのミ祈り入候私も唯今小田原御用邸二出張中故菅公の唱歌ハ出版したるものを帰京の上御郵送可申上左様御承知被下度候帰京ハ廿日頃にて 早々かしこ  
一月十五日  
坂寄みつ子様  
下田歌子  
此内ながら御母君兄君へもよく申給へ